言心先生の中国便り

悲惨な留守児童

今年の旧正月の春節は、1月31日である。約十日前、中国安徽省望江県華陽鎮の一つの小学校で、成績表が配られた。大部分の生徒は、彼らの親と一緒に成績表を貰い、嬉しく家に帰った。しかし、ある三年生の男子生徒は、ひとりで自分の成績表を貰いに来た。彼は九歳で、生まれて間もない時、父母は農村を離れて都市部で農民工という身分で働いている。数年前父母が離婚し、別々の家庭を作り、彼は母側の祖父母の家で生活をしている。数年間彼の親は故郷に帰らず、彼の存在さえ忘れられていた。男子生徒は寂しく家に帰ると、祖母から今年親は故郷に帰らないと伝えられた。男子生徒は無表情でそれを聞いて、何も言わず夕飯を食べた。夜十時ごろ、祖母は孫がベッドにいないと気が付いて、急いで探した。トイレで首をつった状態の男子生徒を見つけたが、冷たい体をだいて、死亡した事が分かった。祖母は泣きながら、父母が帰らないという知らせは、内向的な孫にとっては致命的な一撃だと隣人に話した。

このニュースがテレビ、新聞で報道された以後、歓歓喜喜な春節の雰囲気は少し冷めたかも知れない。大勢の家族全員が家で団欒している人々は、中国に特有の留守児童という社会問題にやっと気が付いた。ある資料によると、中国で父母と離れ離れで生活している未成年の農村児童は、約6100万人(およそ日本全人口の半分)である。その中の8割の児童は、祖父母と一緒に生活をしている。約13%の児童は、その地の親戚の家で身を寄せている。一番信じられないのは、約7%の児童(およそ420万人)は、後見人、親権者ではない人と一緒に生活をしている。

数年前、知人の日本人女性税理士に中国農民工の悲惨な生活状況を話した。日中両国を知り尽くしていると自信を持っている彼女は、筆者に「昔日本にも集団就職ということがあった」と反論した。日本の集団就職とは、農村部の若者が都市部に入り、日本の経済成長期の原動力となったことである。彼らは都市の戸籍を手に入れ、都市部の人と同じ生活をする。しかし、現代の中国の農民工は、都市の戸籍を手に入れず、給料・医療・保険・年金制度は、都市部の人より劣っている。そして、一番犠牲になったのは、農民工の子供つまり留守児童である。中国の現制度で、農民工の子供は、都市部の学校に入る事が出来ない。仕方ないので、自分の子を田舎に残し、長い期間会わず、離れ離れの生活をしている。失われた親子関係と教育を受けないことの子供の成長期への心理的ダメージは計り知れないと思う。

ある中国媒体は、今農民工は子供の明るい未来の為といい、幼い子を田舎に残しているが、十年、二十年後、親の教育を受けずに成長した子供が逆に家庭の暗い問題になると論じた。

そして、それは彼らの家庭問題にすまず、近い未来中国の大きな社会問題になると信じている。